

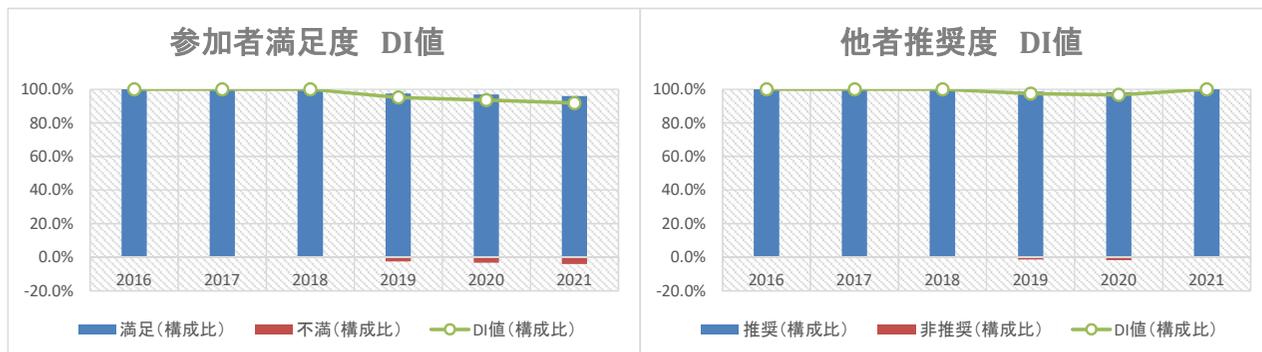
大学教職員のためのスキルアップ研修(英語、多文化理解研修)

<事業概要>

留学生支援の充実や海外大学との連携事業推進など、高等教育のグローバル化が加速するなか、大学教員・職員の英語運用能力は基礎能力として不可欠となっています。

また、多くの国と地域からの留学生には、それぞれの文化的背景があり、円滑な意思疎通を図るためには、語学を超えて、習慣や社会通念、宗教等への理解も欠かせないものとなっています。

このため、様々な場面を想定したケーススタディができる英語運用能力向上のための研修や英語圏以外の文化を学ぶ研修を実施することで、実務能力の底上げを行うとともに、スキルアップに対する意欲向上を図っています。



<参加者の声>

○個別の構成要素やよく使うフレーズの学習から始まり、実践的なロールプレイの時間も合間に挟まれていて、InputとOutputの機会をバランスよく得られたと感じた。

○語学研修は種類も回数もたくさんありますが、文化や習慣を学べる研修はあまりなく良い機会だと思いました。

○すぐに役立つ表現や手法を学ぶことができました。

○講座の内容と自身のレベルが合わなかった。

○東南アジア諸国宗教の大まかな違いを把握することができ、またやイスラムの理解を深めることもでき、自分自身が備えておく知識として、とても勉強になりました。

○ロールプレイで発語をうながす試みはためになりましたが、本当にこの表現あってる？と常に思っていましたので、講師のアドバイスがあればよかったですと思います。

○2日目の後半部分は、私自身の英語力の問題もあり、ロールプレイでディスカッションした中身が本来目指すべきところに到達できなかったと感じた。

<参加者の声を受けて改善を図った点>

○全7回(1年)の講座テーマについては、参加者の意見を踏まえながら入れ替えを行っており、2020年度は従来の”Email研修”を初級編と中～上級編に細分化、2021年度はスピーキングをメインに据えた「Everyday Communication」及び「Meeting and Discussion」を設定するなど、参加者の満足度向上、受講意欲を喚起できる工夫を行った。

○さらに、英語以外の多文化、特に京都で学ぶ留学生の約半数を占める中国文化を学ぶ機会として、2019年度から”中国文化理解研修”を、また、2020年度には東南アジアの生活習慣や歴史的背景、教育、文化、宗教観などを学ぶ研修を増設しており、2021年度においても引き続き実施することで魅力ある研修づくりに努めた。

【総括】

2021年度もコロナ禍の影響により、前年度に引き続いてオンライン開催とした。また、かねてから要望のあった平日開催の講座も設置した。少し複雑なスケジュールとなったため、例年より応募者数は減少したが、リピーターの割合が低く、新たな層に当該研修を知っていただくいい機会となった。また、オンライン開催であったが、全体的にも高い満足度を維持することができた。一方で「レベルが合わなかった」、「難しかった」などの参加者のレベルとのギャップについてのご意見もいただいている。

こういった今後の検討課題を踏まえるとともに、国際連携業務に携わる職員はもとより、留学生の増加などによって多様化する課題に当たる一般職員にも活用いただけるよう、当財団ならではの研修として引き続き企画・実施していく。

参加者満足度

	2016	2017	2018	2019	2020	2021
満足(名)	81	86	99	80	61	47
不満(名)	0	0	0	2	2	2
満足(構成比)	100.0%	100.0%	100.0%	97.6%	96.8%	95.9%
不満(構成比)	0.0%	0.0%	0.0%	-2.4%	-3.2%	-4.1%
DI値(構成比)	100.0%	100.0%	100.0%	95.1%	93.7%	91.8%
参加者数(名)	86	90	102	87	77	68

他者推奨度

	2016	2017	2018	2019	2020	2021
推奨(名)	81	81	95	78	60	44
非推奨(名)	0	0	0	1	1	0
推奨(構成比)	100.0%	100.0%	100.0%	98.7%	98.4%	100.0%
非推奨(構成比)	0.0%	0.0%	0.0%	-1.3%	-1.6%	0.0%
DI値(構成比)	100.0%	100.0%	100.0%	97.5%	96.7%	100.0%
参加者数(名)	86	90	102	87	77	68

※DI(Diffusion Index)値とは

「良い/悪い」「上昇/下落」といった定性的な指標を数値化して、単一の値に集約する加工統計手法のこと。または、この方法によって得られた指数をいう。DIは、時系列データであれば値の増加(プラス)/減少(マイナス)、サーベイデータ(アンケートなど)であれば回答を良い/悪いなどの属性に分類し、その属性の個数を集計して全系列数に占める割合などから算出する。

<http://www.itmedia.co.jp/im/articles/0707/09/news108.html>